

# 「源九郎義経」の研究

瀬尾幸恵

## 目次

はじめに

### 第一章 平家討滅

第一節 黄瀬川での兄弟の対面

第二節 宇治川の合戦——対義仲

第三節 一の谷の合戦・屋島の合戦・壇の浦の合戦——対平家

第四節 平家討滅における世情評価

(一) 木曾義仲についての世評

(二) 源義経についての世評

(三) 源頼朝についての世評

### 第二章 義経・頼朝の人間形成

第一節 保元・平治の乱

第二節 頼朝の生いたち

第三節 義経の生いたち

第四節 義経・頼朝の人格

### 第三章 義経と頼朝の不和の原因

第一節 義経の検非違使尉任官について

### 第二節 正室の子と側室の子

おわりに

## はじめに

この論文を書くに当たり、私が「源九郎義経」を選んだのは、彼が私にとってとても身近に感じる人物だったからである。幼い頃読んだ「牛若丸と弁慶」の話、京の五条の橋の上で、軽やかな動作で大きな弁慶をやっつけてしまう牛若丸に、私は憧れていた。それは義経が幼いにもかかわらず気品を備え、勇気のある所に魅かれていたのかも知れない。それから随分たって中学の頃、ふとしたことから私は義経と静の別れの場面を知る機会を得た。落人であるが故に愛する者と別れなければならないかった義経の気持ち、静の気持ちを考えるとやり切れない思いになる。そして、悲劇の主人公である義経にひどく心を動かされた。また、平家との戦に見られる勇猛果敢で次々と勝利をあげて行く義経に、私は男らしさを感じていた。このように、男性的で英雄的な面と、抒情的で悲劇的な面の二面を持ち合わせている義経に対する興味は増々強くなって来た。

「源九郎義経」を論文に取り上げることに、私がなぜ義経を

身近に感じるのか、改めて考えてみたいと思う。そのため、第一章では、男性的で英雄的な面、一般的に良く知られている平家討滅の戦歴を、京都の人々はそのように評価したかということ、彼の戦歴と義仲・頼朝との比較において述べる。第二章では、なぜ義経はあれ程まで平家討滅に執着したのだろうかということ、彼の生い立ちから考えてみたい。また第三章では、義経と頼朝との不和という義経の悲劇的な原因を考えてみたいと思う。

なお、本文に引用する原文は、小学館の『日本古典文学全集31・「義経記」(梶原正昭校注・訳)』による。( )内はその巻名とページを表わす。

## 第一章 平家討滅

「源九郎義経」彼が一生のうちで一番華々しく活躍するのは、寿永三(一一八四)年から文治元(一一八五)年までのわずか二年間である。この二年間に彼は、宇治川の合戦・一の谷の合戦・屋島の合戦・壇の浦の合戦という大きな戦を四つも行っている。そしてその全てにおいて勝利を収めたのだから、武将としての彼の才能はたいたものである。

この章では、彼の戦の形跡と、それに対する世間の人々の評価を述べて行きたい。

### 第一節 黄瀬川での兄弟の対面

義経が初めて歴史の舞台に登場するのは、治承四(一一八〇)年十月二十一日、黄瀬川での兄頼朝との対面からである。その時の様子を『吾妻鏡』では、

今日、弱冠一人、竹御旅館之砌。稱可奉調鎌倉殿之由。

(中略)武衛自令聞此事。給。思三年齡之程。奥州九郎歟。早可有御対面者。仍實平諱彼人。果而義經主也。即參進御前。牙談往事。催懷舊之淚。(『吾妻鏡第一』治承四年十月廿一日『新訂増補國史大系32』)と記している。

なぜ二人は黄瀬川で兄弟の対面することになったのだろうか。それ以前の社会の状勢を述べてみよう。

頼朝と義経が黄瀬川で対面する年からさかのぼること二十一年前、平治元(一一五九)年平治の乱で源氏を倒し政権を握った平家は、武力を背景として独裁政治を行ったため後白河院並びに貴族の反感を買っていた。

治承元(一一七七)年、京都鹿ヶ谷で平家打倒の計画が立てられているのを知った平清盛は、会合に加わっていた後白河法皇を幽閉し、反乱に対する監視の目を強めていった。

このような状態の中、清盛は伊豆に流した源氏の嫡流頼朝のことを思い出し、反対勢力の頭ともなりかねない頼朝を消してしまおうとした。『吾妻鏡』は、六月十九日に三善康信の使者が伊豆に下着して、清盛が頼朝を捕殺するかもしれないから早く奥州に逃げるようにという康信の勧告をつたえた、と記している。(永原慶二『源頼朝』P.66)危険が身辺に迫っていることを知った頼朝は、平家と戦うことを心に決めた。治承四(一一八〇)年八月、頼朝は石橋山の合戦で平家の軍勢に一度は敗れたが、何とか軍を立て直し、富士川をはさんで平家の追討軍とにらみあっていた。しかし均衡は破られ頼朝は思いがけず勝利を収めた。富士川の水鳥の羽音を敵の奇襲と間違えた平家軍が、一戦も交えず京都に逃げ帰ったからである。そ

こで頼朝は、平家を追わず地盤を固めるため関東へ引き上げることにした。その途中、黄瀬川で陣を休めていた時、兄頼朝の拳兵を聞いて奥州から駆けつけて来たという義経と対面したのである。

その時の様子を『義経記』では、

佐殿、九郎御曹司をつくづくと御覧じて、先づ涙にぞ咽ばれける。

御曹司もその言葉の色は知らねども、共に涙に咽び給ふ。(巻第四「頼朝義経対面の事」P.190)

と述べている。義経にしてみれば長い間待ち望んでいた肉親との対面である。感慨深かったにちがいない。頼朝も義経についてこう語っている。

「(前略) 今日より後は、魚と水の如くにして、先との恥を清め、亡魂の憤りを休めんとは思召されずや。御同心に候はば、尤も然るべし」と宣ひも敢へず、涙を流し給へり。(巻第四「頼朝義経対面の事」P.190～191)

血縁関係の深い弟の馳せ参じた事を大変喜び、力を合わせて平家討滅に尽力しようと心に契い合った。義経も、

「今君を見奉り候へば、故頭殿の御見参に参り候ふ心地してこそ存じ候へ。命をば故頭殿に参らせ、身をば君に参らす上は、如何仰せに従ひ参らせでは候ふべき。(巻第四「頼朝義経対面の事」P.192)

自分の身を頼朝に捧げるといふ意志を示した。以上が文獻に著されている二人の対面の様子であるが、真実、この兄弟の初対面における二人の心理状態はどのようなものだったであらうか。

この時、頼朝は、源氏の嫡流という血筋によって一応一軍の将と

はなっていたが、流人生活を送っていたため味方の軍勢は少なく、また確固たる所領をも持っていなかった。源氏の嫡流という貴種性のみが頼朝にとっては切り札であってそれ以外は何も持っていない。彼は心の内に自分の無力感・孤独感をしみじみと感じていたであろう。平家を討ちたいが、頼朝自身が京都へ向えば東国が心もたなく、代理を頼める兄弟もない。他の者を使わずと、平家と気脈を通じて、返って東国を攻めることもあらうと思われるのでそれも出来ない。そんな時、弟の義経が奥州から駆けつけて来た。頼朝は、血縁という強い絆を持つ味方、自分の貴種性を極立たせる味方を手に入れた。平家を倒すことによって自分の地位が保てる頼朝には、信頼のおける義経の出現は心の慰めでもあり、利用しやすい人物でもあった。

これに対して、幼い頃両親と別かれ肉親の情を知らず孤独の内に成長した義経は、血のつながる兄に対面出来たことで、自分は一入ぼっちではないんだという安堵感を持ったことであろう。

## 第二節 宇治川の合戦——対義仲

頼朝・義経兄弟が感動的な対面をした翌年の養和元(一一八一)年正月十四日、高倉天皇が崩御され、平家は後白河法皇との折衝に必要な足場を失った。高倉天皇の死後、後白河法皇は勢力を盛り返し再び政権の座についた。こうした情勢の中で清盛は、閏二月四日「頼朝の首を我が墓前に……」と言い残して、六十四歳の波瀾に満ちた生涯を閉じた。清盛の亡き後、平家の家督は宗盛が継いだ。父の敵、母の敵である清盛を自らの手で討ちたいと考えていた義経は、どうすることも出来ないそのむなしさに心を痛め、心中穏かならぬ状態

にあったにちがいない。しかし義経に手勢はなく、今はただ手をこまねいているしかなかった。

そうしたところに、頼朝・義経のいとこに当たる木曾義仲が拳兵し、寿永二(一一八三)年五月十一日、有名な俱利伽羅峠の戦いで平家に圧勝し、七月入京して平家を西国に敗走させた。しかし義仲は、先例・慣習を省みない無辺一辺倒の男であるために、貴族達には粗暴に見えた。また、入京した義仲の軍勢は、「物取追捕、兼日陪増す、天下已に滅亡」(永原慶二『源頼朝』P102)という程に狼藉を極めた。「もともと寄合い世帯で、統制がないうえに、飢饉の絶頂にあったのだから、掠奪行動はさげられず、これが、たちまちに院以下貴族の反撥をまねいたのである。」(同前P105~106)後白河法皇は、頼朝に義仲を京から追放してほしいと頼んだ。そのため頼朝は、その年の閏十月弟の範頼・義経を京に向かわせた。義経も、いとこである義仲を討つということには多少疑問を覚えたであろうが、平家を滅ぼすためには先ず義仲を討つ必要があるとすれば、それともめらいはしなかった。そして寿永三(一一八四)年一月、「梶原景季、佐々木高綱の先陣争いで知られる宇治川の合戦で、勝利を博した義経軍は一気に京に突入して法皇を義仲軍から救出した。義仲は敗走中、範頼軍に粟津で討たれた。」(江崎誠致「破竹の平家討滅」P43『歴史と人物』)木曾義仲は三十一年の生涯を閉じた。

### 第三節 一の谷の合戦・屋島の合戦・壇の浦の合戦——対平家

義仲討伐後まもなく、義経にとっては待ち望んだ平家追討の院宣が下った。今こそ亡き父義朝の敵を取るべく義経はいきりたつて、

一の谷に陣を布く平家軍攻撃に出動した。寿永三(一一八四)年一月二十九日のことである。この一の谷の合戦でも義経は、「鹿のかよはう所を馬のかよはぬやうやある。」(『平家物語二』

#### 巻第九「老馬」P221)

「馬どもはぬし／＼が心得ておとさうには損ずまじいぞ。くはおとせ。義経を手本にせよ」とて、まづ卅騎ばかり、まっさきかけておとされけり。(同前巻第九「坂落」P235~236)

という鶺鴒の坂落等の奇襲作戦で平家軍を海上へ追い落とし、平家軍に圧勝した。そして意気揚々と京に凱旋した義経は、後白河法皇により検非違使副に任官され、また従五位下に叙せられ、昇殿をも許された。念願の平家討滅への第一歩を果たすことが出来たばかりでなく、思いがけぬ法皇からの任官・昇殿を許されたことに義経は満足していた。

しかし、武士権力の樹立を念願とする鎌倉の頼朝は、義経が自分に無断で任官を受けたことを快く思わなかった。そのため「頼朝は義経を平家追討軍からはずし、範頼に侍所別当の和田義盛をつけて総指揮を命じた。範頼は山陽道から九州に渡り、内海を包囲して平氏を討とうとしたが、食糧や船舶の調達が思うにまかせず、東国からはるばる出兵した武士たちの士気低下が目立ちはじめた。」(江崎誠致「破竹の平家討滅」P44~45『歴史と人物』)やむなく頼朝は、義経を平家追討に起用した。頼朝は今までの数々の戦勝利から、義経の武将としての才能だけは認めざるを得なかったからである。

元暦二(一一八五)年二月、義経は、四国の屋島にいる平家軍を討つべく出撃した。その時も義経は、今度こそ平家討滅を、と息巻いていたに違いない。だから義経は、暴風雨の中頼朝の付けた梶原

景時の忠告も聞かずに船を乗り出したのだらう。義経は、又もや背後から屋島の平家軍を襲う奇襲作戦で平家軍を海上に追いやった。そして、海上に漂っている平家軍を三月壇の浦の合戦で徹底的に叩きのめし、勝利を掌中に収めた。義経は平家軍の捕虜を連れて意気揚々と京都に凱旋し、京都の人々に歓待された。義経は得意であり、鎌倉でも歓迎されるに違いないと心を躍らせ、捕虜の宗盛父子を伴って関東に下ったのである。

#### 第四節 平家討滅における世情評価

##### (一) 木曾義仲についての世評

京都の貴族達は、平家の独裁政治を快く思っていなかった。そのような状況の時、為義の孫で頼朝・義経のいとこに当たる木曾義仲は、源行家と協力して京都に攻め入り、平家を四国に追い払った。喜んだ法皇は「義仲を左馬頭・越後守とし、行家を備後守に任じ、ともに従五位下に叙した。」(永原慶二「源頼朝」P.105) 貴族達は、義仲に平家とは違った世の中を期待していた。にもかかわらず、入京した義仲の軍勢は掠奪を行い、貴族達の生活を脅かし始めた。義仲の軍勢が掠奪を企てたりしたのは、京都が「飢饉已に迫り来り、存命し難し」「天下之運已に尽く」(同前P.102)などの大飢饉であったためで、義仲のせいとは言いが切れないが、貴族達はそうは思わなかった。その上、義仲は、貴族達が大切に守り続け誇りとしていた慣習・有職故実をうまくこなすことが出来なかった。『平家物語二』巻第八「猫間」(P.144~148)にこれらのことは描かれている。彼の振舞いは、木曾の山奥くで育った生活事情からやむをえない事ではあったが、貴族達の失望は増すばかりであった。

貴族達は、義仲に対して、平家政権の苦しみから助けてくれる救世主を望んでいた。にもかかわらず、義仲勢の京都の治安状況は、その期待を大きく裏切ったので、貴族達の義仲に対する評価は決して芳しいものではなかった。

##### (二) 源義経についての世評

木曾が狼藉しづめんとて、鎌倉の前兵衛佐頼朝、舎弟浦の冠者範頼、九郎冠者義経をさしのぼせられける。『平家物語二』巻第八「法住寺合戦」P.172)

寿永二(一一八三)年十二月、義経は、平家が変わって京都に君臨しているいとこの義仲を討つために京都に向った。そしてすぐに、大將軍九郎義経、軍兵どもにいくさをばせさせ、院の御所のおぼつかなきに、守護し奉らんとて、まづ我身共にひた甲五六騎、六条殿へはせ参る。(同前巻第九「河原合戦」P.186)

法皇の御所を守護した。その手際の良さに法皇も大変喜ばれたことだらう。義経の株は一つ上った。義経は宇治川の合戦で義仲を討った。そして平家を一の谷の合戦で破って京都に戻るやいなや、法皇によって検非違使尉に任官され昇殿までも許された。義経はトントン拍子に出世した。その時の義経の様子を、京都の人々は、

木曾などには似ず、以ての外に京なれてありしかども、平家のなかのえりくづよりもなほおとれり。『平家物語二』巻第十一「大嘗会之沙汰」P.347)

と評している。義経は、義仲よりは京慣れしているが、平家の中のよりかすよりも劣っていると言うのである。その言葉の中には、西海に落ちのびなければならなかった平家への哀みと、トントン拍

子に出世した義経に対する嫉妬心が含まれているような気がする。

その後義経は、元暦二（一一八五）年三月壇の浦の合戦で平家軍を滅ぼし、平宗盛父子の捕虜を連れて京都に凱旋した。京都の人々も、

ただ九郎判官ほどの人はなし。鎌倉の源二位は何事をかしいだしたる。世は一向判官のままにてあらばや。（同前巻第十一「文之沙汰」P 419）

と、義経を欲待した。同じように、梶原景時が鎌倉の頼朝に宛てた手紙にも、「天下静謐の功、偏に判官殿に在り、と、法皇も思召され洛中貴賤男女も之を申し」（小泉輝三郎『吾妻鏡を耕す』P 91、92）とあることから、義経は、平家討滅の第一功労者として都の人々に認められ、大いに欲待されていたことがわかる。

また、宗盛父子の助命を頼朝に請うと、宗盛父子に約束してやるという所などから、

中将申されけるは、「判官はおほ方もなさけある者にて候なるうへ」（『平家物語二』巻第十一「文之沙汰」P 418）

と、人情に厚い人物とも評されている。

そしてまた、女房が宗盛に宛てた手紙に、

「九郎はすずき男にてさぶらふなれば」（同前巻第十一「勝浦付大坂越」P 361）

と、述べられている箇所がある。このように、「敏捷な鋭い抜目のない性格」（小松茂人「義仲・義経」P 52『国文学』）、何事においてもひるまず、積極的で躍動感のある姿にも、人々は心を奪われたのではないかと思う。

そうして、勇猛果敢で人情に厚い義経に、京都の人々は、初めこ

そ嫉妬していたが、しだいに、敬愛の念を抱くようになっていったようだ。

### （三）源頼朝についての世評

頼朝は、治承四（一一八〇）年富士川の合戦の勝利後、鎌倉で自らの力を蓄えていた。その間に平家は都落ちし、義仲が政権を握った。しかし義仲は掠奪などの狼藉を行うので、法皇は頼朝に入京し義仲を討つことを依頼した。しかし、頼朝は、自分は鎌倉から一歩も出ず、弟の範頼・義経を自分の代理として出動させた。義仲を討ち、その勢いで平家を滅ぼした源氏軍に対し、京都の人々は、

ただ九郎判官ほどの人はなし。鎌倉の源二位は何事をかしいだしたる。（『平家物語二』巻第十一「文之沙汰」P 419）

と評した。義仲の狼藉を鎮める力を持つのは鎌倉の頼朝しかいないとその力は認めていたものの、自分自ら先頭に立って戦うことのない頼朝を京都の人々は軽蔑していたようだ。また法皇方は、これだけの兵力を持ちそれを動かすことの出来る策略家の頼朝を、不気味な存在として感じていたのではないだろうか。

平家討滅という戦乱の中で、京都の人々から比較的高く評価されたのは義経だけで、義仲、頼朝の評価はあまり芳しくなかったようだ。なぜ義経だけが高く評価されたのだろうか。

義仲があまり良く評価されなかったのは、京都で狼藉を働いたため頼朝が良く評価されなかったのは、自らの手を汚さずに勝利を収めるといふ武將らしくない行動をしたためだと思ふ。ただ一人高く評価された義経は、頼朝と違って、猛々しく第一線で戦い勝利

を次々に収めて行った武將らしさを持っていたからである。それは義仲にもあったが、義経が義仲と違うところは掠奪を働かなかった点にある。義仲の軍は寄せ集めの兵で掠奪を思うままにし、義仲は、その兵を統制することが出来なかった。これに対して義経の軍は、直接的には頼朝の兵であり、食糧の供給等は関東から円滑に行われ、狼藉を働くと厳しい処罰があるという規則が整えられていた。このように義経は、統制のとれた兵を思う存分活用することによって次々と勝利を収めて行くことが出来、またその軍略と人柄によって義経は、京都の人々に高く評価されたのではないかと思う。

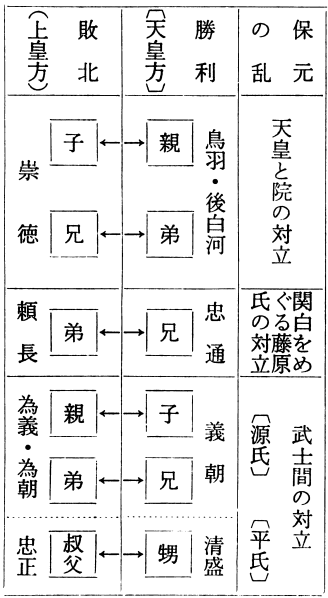
第一章では、義経の戦いぶり、平家討滅に対する世上の評価について述べて来た。そこで次の章では、なぜ義経が平家討滅にあれ程まで執着し尽力したのかということ、彼の生いたちから考え、合わせて、義経が京都の人々に好感を持たれた人柄について、頼朝と比較しながら考察して行きたいと思う。

### 第二章 義経・頼朝の人間形成

性格というものは、社会状況・出生時の境遇・成長過程での環境などによって形成されて行くものだと思う。そこでこの章では、二人の父義朝と関わりのある保元・平治の乱について述べ、次いで頼朝・義経の生いたちから二人の人間性について考えてみたいと思う。また、義経の生いたちの中から、彼がなぜ平氏打倒にあれ程まで力を尽したのかということも考えて行きたい。

#### 第一節 保元・平治の乱

頼朝・義経の父である義朝は、八幡太郎義家から数えて四代目にあたる源氏の正嫡であった。「彼は当時平氏におされがちの家運を、義家の盛時にもどそうとして野心にもえていた。」(永原慶二『源頼朝』P10)ちょうどその頃、皇室内部の対立に摂関家の内紛がからんで保元元(一一五六)年七月世に言う保元の乱が起った。義朝は、平清盛と共に天皇方につき、彼の父為義は、藤原頼長に臣下の礼をとっていたから上皇の側についていた。天皇方は、義朝の作戦を用いて夜襲をかけ一挙に勝利をつかんだ。「この合戦の勲功第一だった義朝は、昇殿をゆるされ、躍進の機会をつかんだかのごとくであったが、半面、父為義以下一族の多くを勅命によって殺し、かえって孤立の状態におちいった。」(同前P14)



〔傍用日本史ノート〕P21 兵庫歴史学会

保元の乱の後、義朝と清盛は、互いに勢力を競って対立したが、それに藤原通憲と信頼との対立がからみ合い、義朝は信頼と結んで平治元(一一五九)年兵を挙げ平治の乱となった。義朝は、平家の

拠点六波羅を攻めたが敗れ、関東に落ちのびようとした途中、尾張の国で長田忠致に殺された。この戦に加わった義朝の長男義平は、清盛の命をねらったが捕えられて斬られ、次男朝長は、父義朝と共に東走の途中、戦傷のため行動をとるにすることができなくなつて自決した。

頼朝・義経の父義朝は、自分の野心のために結局は三十八年という短い生涯を閉じた。この父の死は、二人にどのような影響を与えたであろうか。

## 第二節 頼朝の生いたち

源頼朝は、源義朝の第三子として久安三(一一四七)年に生まれた。母は、熱田太宮司藤原季範の娘で正室である。

頼朝の幼年期についてはほとんど知ることが出来ないが、その頃は父義朝の地位が高まつて行く時であったから、日々の生活も恵まれていたであろう。一一五六年の保元の乱の時彼は十歳だった。父義朝の戦功によつて彼もまた皇后宮権少進に任官された。また、『平治物語』に、

鎧に産切、太刀にひげきりとて、ことに祕藏して嫡々に譲しかば、  
悪源太にこそたぶべかりしを、三男なれ共、頼朝は末代大將とぞ  
み給ひけるにや、頼朝にたびけり。(P 220、日本古典文学大系)  
とあることから、三男ではあったが幼時より義朝の跡を継ぐべき人物として育てられていたのである。頼朝は、後の源氏の棟梁として大切に育てられていたに違いない。

このような状態の時、一一五九年平治の乱が起つた。十三歳になつた頼朝は、初陣をつとめたが戦に敗れ、父と共に関東に落ちのび

ようとした。しかし、途中関原の雪深い山中で父達の一行に遅れた所を、平盛の家人に捕えられて京都に護送された。

ここで当然殺される運命にあつた頼朝は、頼盛の母で清盛には継母にあたる池禪尼や頼盛の懇請によつて助命された。

それから間もなく、頼朝の配流国は伊豆と決められ、永暦元(一一六〇)年三月十一日京都を発つた。配所は蛭ガ小島と言われている。

頼朝は、それ以後三十四歳の壮年に達するまでの二十年間、流人生活を送ることになる。彼は、その青年期をどのように過ごしていたのであろうか。「吾妻鏡」は配所の彼の生活が、ほとんど写経・読経といった宗教的勤行にあげくられたと伝えている。(永原慶二『源頼朝』P 20)しかし、頼朝の単調な日々を慰めてくれる人々が全くなかったわけではない。京都の下級官僚三善康信は、母が頼朝の乳母の妹であつたことから頼朝に深い同情を寄せ、毎月三度ずつ便りを送つたという。康信は、後に平家出身の中宮徳子の庁に仕えることになつたので、平家の動きについてはその情報も詳しく知っていたに違いない。

こうして頼朝は、源氏の嫡流としてのプライドを内に秘めつつ、流人生活の中で耐えるということと、社会の物事をじっくり客観的に見る事が出来るようになったのではないかと思う。

## 第三節 義経の生いたち

源義経は、源義朝の第九子として平治元(一一五九)年に生まれた。母は九条院の雑仕常磐であり、頼朝とは異母兄弟ということになる。その誕生後まもなく平治の乱が起こり、義経は父と離れ離れ



になつてしまつた。当時義経（幼名牛若）は生まれたばかりの赤ん坊だつた。父義朝は東国に落ちたが、まもなく三十八年の短い生涯を閉じた。義経は、生まれて間もなく父を失ひ、父親というものを知らずに育つたのである。

その後、平清盛が義朝の子供達を捕えて斬るに違ひない、という噂が伝わつたので、平治二（一一六〇）年二月十日の明け方、常盤は、三人の子供を引き連れて京都を脱出した。ところが、常盤の母関屋が、平家方に呼び出され六波羅で敵しく取調べを受けているという噂が耳に入ったので、常盤は泣く泣く三人の子供を引き連れて京都へ戻つて来た。まもなくして、常盤は子供もろとも六波羅に引き立てられた。

清盛、常盤を見給ひて、日ごろは火にも水にもなしたく思はれけるが、怒れる心もやはらぎ給ひけり。（巻第一「常盤都落の事」

P 49）

常盤は、日本一の美女だったのである。そのため、

清盛、われにだに従はば、末代は子孫の為にはいかなる敵にもならばなれ、三人の子どもをば助けばやと思はれける。（巻第一「常盤都落の事」P 50）

清盛は、常盤が自分の意に従えば三人の子の命を助けてやろうと思つた。常盤も、子供達の命を助けたいのために清盛の意に従うことにした。このようにして、三人は敵の大將平清盛によって命を助けられたのである。余談になるが、清盛は、池禪尼の哀願により、源氏の嫡流で義朝の三男に当る頼朝の命を助けてやつた。清盛は、女性に対しては非常に慈悲深い男性であつたのかも知れない。鬼の清盛の人間的な一面を見たような気がする。

弟の牛若は、四の歳まで母のもとにありけるが、世の幼き者よりも、心ざま、振舞も越えたりしかば、清盛つねに心にかけて宣ひけるは、「敵の子を一所に置きては、終にはいかがあるべき」と仰せられければ、京より東、山科といふ所に、源氏相伝の者通世して幽かなる住居にてありけるところに、七歳まで置きて育てけり。（巻第一「常盤都落の事」P 51）

牛若は、生後間もなく父と死別しただけでなく、四歳にして母と別れて暮さなければならなくなつた。四歳のいたいけな子供が、母と別れて暮すことがいかに淋しくつらいものであつたかは想像に難くない。しかし、まだ山科は京都近郊の地であり、そのうえ、母常盤と全く別れてしまつたというわけではない。これは私の想像だが、清盛は日本一の美女である常盤を六波羅のどこかに住ませ、時々そこへ通つていたのではないだろうか。乳飲み児である幼い牛若は母の許にいたが、今若・乙若はそれぞれ僧になるために既に母とは別れさせられていた。しかし、牛若も四歳になり物心がつき始める時期になつたので、清盛は自分の身近に置いては危いと思ひ、常盤に牛若をどこかにやるように言つた。そこで常盤は、牛若を六波羅とはさほど遠くない山科に住む代々源氏に仕えている者の所へ預けた。そうすることによつて、常盤は直接牛若を育てることは出来ないうが、時々会いに行く事は出来たのではないだろうか。もちろんそれだけで、わずかに四歳の小さな子供の心が安らぐわけはない。肉親と別れて暮す淋しさは、例えようもない程深かつたにちがいない。

このように不安定な状態の中で牛若は成長して行つた。母常盤は、牛若の行く末を案じて、義朝が祈禱を頼んでいた師僧・鞍馬の別当東光坊の阿闍梨に使いをやつて頼んだ。

「義朝の末の子、牛若と申す幼き者は、知召し候ふやうに、平家の世ざかりにて候ふに、女の身として持ちたるも、心ぐるしく候。鞍馬に参らせて候はば、猛くともおだしき心もつき、文の一巻をも読ませ、御経の一字も教へ給ひ候へ」（巻第一「牛若鞍馬入の事」P 52～53）

今の平家全盛の世に牛若を身近に置いておくのは忍びない。世間と離れ、僧となるのが牛若のためになるだろうと常盤は考え、永万元（一一六五）年二月初め、牛若七歳の時鞍馬へ登らせた。牛若は七歳にして、一番頼りにしている肉親や母と別れなければならなくなつたのである。

鞍馬での生活は、

星は終日に師の御坊の御前にて経を読み、書を習ひ、白日西に傾き、夜深更にふけゆきけれども、仏の御燈の消えざるをともし、物を読む。五更の天にはなれども、朝も宵もすすまで、学問に心をのみぞ尽くしける。（巻第一「牛若鞍馬入の事」P 53）

というふうなものであった。牛若は何かに憑かれたように学問に熱中した。その心中はどうだったのだろうか。牛若は根つからの学問好きな少年だったのだろうか。それもあるかも知れないが、私には、母親と離れて暮す淋しい生活の中で牛若が気を紛らすために学問に打込んだような気がしてならない。世俗の中で暮していたら彼はこれ程まで学問に打込まなかつたのではないだろうか。そこには他に気を紛らすことの出来る対象が数多く存在しているから。しかし、鞍馬という奥深い山中で僧侶に囲まれて生活していた牛若には、学問より他に打込めるものがなかつた。そうすることで、彼は心の平穏な状態を保とうとしていたのではないだろうか。

右の引用した文章には疑問点が一つある。それは、「朝も宵もすすまで」の「すすまで」の意味である。梶原正昭氏の訳によれば、「朝も夕方も区別なく」となっている。「すすむ」と言うのを、「程度がはなはだしくなる」（『古語大辞典』小学館）と言う意味から「区別なく」と訳されたのかも知れないが、少し訳し方に無理があるように思われる。この部分は、岩波書店の『日本古典文学大系』によれば、「あまもよひもすぐまで」となっており「すすまで」ではない。「すぐまで」であれば、岡見正雄氏の「朝も宵も遅くまで」の訳が妥当と思う。それは「時が経つ」（『古語大辞典』小学館）と言う意味からこのように訳されたのだと思われるし、「すぐまで」の方が、語意的にも適当であるように思われる。また、「すぐまで」の方が、義経が一生懸命勉強している様子が良くわかると思う。

この「すすまで」と「すぐまで」の違いはどこから来たのだろうか。「すすまで」の方は写本である田中本を底本としており、「すぐまで」の方は版本である古活字本を底本としている。他の流布本も木活字本系も「あまもよひもすぐまで」となっていることから、『義経記』が写本される過程で間違つて「すすまで」と書き写され、それがそのまま伝えられたのではないかと思う。

このような牛若の鞍馬での熱心な学問ぶりを見て、僧侶達は、「かくて廿歳ばかりまで学問し給はば、鞍馬の東光坊より後、仏法の種をつぎ、多聞の御宝にもなり給はんずる人」（巻第一「牛若鞍馬入の事」P 53～54）

と期待をかけていた。また、そういう牛若の様子を伝え聞いた母常盤もたいへん喜んだ。しかし母は、牛若を自分の手許に置こうとはしなかつた。それとは逆に、

「つねに里へ下らんと申せばとて、下させ給ひ候ふな。いかに学問の精よくとも、里にありなるとしつれば、心も不用になり、学問も怠り候ひなんす。恋しく見たきと申し候はん時は、わざと人を賜はり候へ。わらはそれまで参りて、見もし見え候はん」(巻第一「牛若鞍馬入の事」P 54)

と言った。それが当然な事であったし、寺の者も、

「尼を里へ下すこと、おぼろげならぬこと」とて、一年に一度、二年に一度も下さず。(巻第一「牛若鞍馬入の事」P 54)

牛若をむやみに里へ下山させなかつた様である。年に一度世俗に触れることがあるかないかの生活。牛若は、本当に純粹な心のままで成長して行つた。

そうして最も心の不安定なところである十五歳を迎えた時、牛若は、義朝の乳兄弟の子供である少進坊と言う僧侶と、運命的な出会いをした。彼は牛若に、

「君は清和天皇の十代の御末、左馬頭殿の御子、。御一門の源氏国々に打籠められて御渡り候ふをば、心愛しとは思召されず候ふかや」(巻第一「少進坊の事」P 57～58)

と迫った。牛若は驚いたことだろう。平家の全盛時代に、自分が平治の乱の敗者源義朝の子供であることを知つたのだから。瞬間、思春期の多感な彼は少進坊を警戒したに違いない。しかし、少進坊が源氏代々の事跡を詳しく語つて聞かせるにつれて、次第に彼は少進坊の言うことを信じた。そのことがあつてから、牛若は学問に励まなくなり、朝夕ただ謀反のことばかり考えていた。そして、夜になると鞍馬寺から二キロ離れた貴船神社に参り、謀反の決意を堅めていた。

四方の草木をば平家の一類となぞらへ、大木の二本ありけるを、一本を清盛と名づけ、一本をば重盛と名づけ、太刀を抜いて散々に斬り、ふところより毬打の玉の様な物を二つとり出し、木の枝にかけて、一つをば清盛が首、一つは重盛が首とて懸けられけり。かくて晝にもなりしかば、忍びて帰り、我が坊に衣引きかづき臥し給へり。(巻第一「牛若貴船詣の事」P 59～60)

四歳にして母親と別れなければならなくなつた淋しさ。その原因を作つた平家一門に対する怨みは相当深かつたと思う。だから、昼間でも日の光の当たらないような奥深い山中を、二キロも離れた貴船神社まで、夜たった一人で駆け抜けて行き、平家討滅の祈禱をしたのだと思う。それ程義経は、肉親の情に飢えていたし、平家一門に対する怨みも相当深かつた。だから義経は、平家を倒すために一生懸命になつたのだと思われる。

そうこうしているうちに年は明け、遮那王(牛若はこう呼ばれていた)は十六歳になつた。彼は、金商人の吉次宗高と言う男から自分を養護してくれそうな奥州の藤原秀衡のことを聞き、居ても立つても居られなくなり奥州へ訪ねて行くことにした。他人を信じやすく怖いもの知らずで、思いついたことはすぐ実行するという面を遮那王は持っていたようだ。彼は、涙にむせびつつ師匠と別れ、承安四(一一七四)年二月二日の明け方に鞍馬を出た。

奥州の藤原秀衡は、今の平家の世にあつて自分の身も安泰ではない。それゆえ、平氏に対抗する源氏の血筋の人物を奥州に迎えて、「上見ぬ鷲のように天下を睥睨してみたい」と吉次に漏していた。その白羽の矢を受けた遮那王は奥州へ下り、その道中で元服し、「源九郎義経」と名乗つたのである。途中数々の試練を経て年内に奥州

へ着いた。奥州へ着いた義経は藤原秀衡に歎待され、青年期を奥州で過ごすことになった。秀衡は、平治の乱に敗れ、奥州に遠流された民部権少輔基成と言う謀反人を被護した程の、慈悲深く情に厚い人物であった。秀衡に守護されている義経が彼の影響を受けないはずはない。義経の人間味豊かな性格は、こうして形成されて行ったのではないかと思われる。

義経は、幼・少年期を肉親と離れて暮らす淋しさを嫌やと言う程味わって来たので、他人からの優しさには非常にもろい所がある。また、僧侶の中で育って来た生活環境のせいも、他人に対しても身分差の別なく平等に接することが出来た。しかしその反面、義経は幼児期から世俗と離れた特殊な生活を送って来たため、権力をとりまく人間関係のあさましい渦を知らないまま成長していった。だから彼にとっては梶原景時の様な人物は全く意識外の存在だったのである。結局は、その梶原の讒言により身を滅してしまっただけである。

#### 第四節 義経・頼朝の人柄

頼朝も義経も共に、父義朝の野心によって肉親と離れて生活しなければならなくなった。二人とも厳しい孤独な境遇をじっと耐えて来た。それなのに、二人の性格があまりにも異っているのはなぜだろうか。

頼朝の一般的評価は、利己主義者とみなされている。私もそう思う。その原因を彼の生いたちから考えてみたいと思う。頼朝は幼い頃から源氏の嫡子として育てられ、おのずと高家のプライドを持っていた。彼は長い流人生活に耐えながら、エゴイズムで猜疑心の強

い性格の人に育ったように思われる。もし彼に家門のプライドがなければ、或は、宗教的動行に打ち込んでこれ程の疑い深い性格にはならなかったのではないかと思う。

それに比べ義経は、幼少期に母親と別れて過したので肉親に対する愛情はとても深く、優しい言葉にもろくその人を信じてしまう単純な面を持っていたようだ。また、世俗とかけ離れた仏法の慈愛の中で育った環境から、世情に疎く単純ながら、純粋な心を持ち続けた人物と言える。

このように二人の人柄を比較してみると、義経は陽気で単純な性格の持ち主であり、頼朝は陰気で慎重な性格の持ち主であったと言える。

その人柄の違いは、生いたち、境遇の違いばかりでなく、彼らがその不遇な運命に遭った時の年齢差にもよるのではないかと思う。即ち十四歳の頼朝と四歳の義経の年齢の差から来る不運な運命に対する衝撃、その強い印象の違いにもあるのではないかと思う。

以上、この章では二人の性格、義経が平家討滅に尽力した理由について考えてみた。そこで次の章では、兄弟不和の原因を、その性格以外の問題から考えてみたいと思う。

### 第三章 義経と頼朝の不和の原因

#### 第一節 義経の検非違使尉任官について

念願の平家討滅を果たした義経は、意外にも頼朝から鎌倉に入ることを拒否された。義経には理解し難い事であったに違いない。平家討滅に一番の武功をたてた自分が、歓待はおろか、鎌倉へ入るとすら許されないということは、仕方なく義経は、不審と不安のま

ま腰越に留まっていた。

鎌倉の頼朝は、義経が関東へ下る以前、梶原景時の報告を聞いていた。

「判宮殿は、内に野心を挟みたる御事にて候。」(巻第四「義経平家の討手に上り給ふ事」P 193)

義経の野心とは、一体何だったのだろうか。それはただただ平家討滅であった。しかし頼朝の念願はそうではなかった。義経の目的とした平家討滅は、頼朝にとっては単なる手段に過ぎなかった。なぜなら、源氏の嫡流であるという貴種性のみが全ての頼朝は、自分が上に立つこと、即ち武士政権の樹立が目的であった。その頼朝独自の政治権力の基礎が関東武士団であった。その関東武士団が期待し祈願していたのは、彼等の所領を安全・確実に保護し、彼等の争いを公平に裁判してくれる指導者であった。鎌倉幕府は寄り合いで行かなければならない。そのためには弟である義経も含めて、部下のひとりひとりに公正でなくてはならないのである。」(武田八洲満「凱旋將軍、紅涙の腰越状」P 49『歴史と人物』)しかし、兄頼朝の真意を知らない義経は、一の谷の合戦後、後白河法皇から檢非違使尉に任官され有頂天になってしまふ。幼い頃から孤独であった義経が、法皇から優しくされればそれに甘えてしまふのも無理はない。だが頼朝にしてみれば、自分に無断で朝廷から叙勲されては困る。「いくさの論功行賞は、統領である自分が直接おこなうのが筋なのである。それでこそ公正が保たれ、団結が守られることにならう。武士たちは忠節を誓い、それによって幕府の基礎が固められるのである。武士の功名認定は、統領の重要な仕事であった。それを朝廷がさき

んじておこなってしまっている。自分の権威はないがしろにされてしまっていた。」(武田八洲満「凱旋將軍、紅涙の腰越状」P 50『歴史と人物』)それでは頼朝が憤慨するのも当然である。しかし、このような頼朝の思惑を知らない義経は、「腰越状」の中で檢非違使尉任官については、

剩へ義経五位尉になる条、当家の面目、稀代の重職、何事かこれに如かんや。(巻第四「腰越申状の事」P 200)

と、ただただ源氏一門の名誉であると考えており、任官されたことについて頼朝が怒つていようとは露ほども思いつかなかった。また、梶原景時はこうも報告している。

「東国西国の兵も、万事一同に仰ぎ奉り、野心を挟みたる人にておはする間、人毎に情をかけ、末座の侍までも目をかけられ候ふ間、侍共、『あはれ侍の主や、この殿に命を奉らん事は、塵よりも惜しからじ』と申して、一同に心を懸け奉りて候。」(巻第四「義経平家の討手に上り給ふ事」P 195)

義経は武士達から一目置かれていた。独自の政治権力を打ち立てようとする頼朝にとって、外部からの脅威(平家・法皇)より、何よりも恐れていたのは内部からの分裂である。なぜなら頼朝にとって、鎌倉殿と呼ばれるべき者は自分一人であつて、他にたくさんいては統制がつかなくなるからである。まして義経は、同じ源氏の血を受け継いでいるが故に、頼朝にとっては、自分の地位を脅かす最も身近で危険な人物だったのである。こんな危険な人物を鎌倉へ入れるわけにはいかない、と、頼朝は思った。しかし、義経は、自分が頼朝にとって代わる可能性を秘めていると言うことに気付いていなかったし、また、頼朝が自分を危険人物視していようとは全く考えてい

なかった。だから義経は、自分が鎌倉に入れてもらえないことについては讒言者がいるぐらいにしか思っていないかった。

検非違使尉任官について、義経は一門の名誉だとのみ考え、頼朝に無断で任官されたことについて悪かったとは全然思ってもいなかったし、なぜいけないかと言うことも、わからなかったのではないだろうか。それに対して頼朝は、統制を崩すルール違反をした義経を、兄弟であるが故に厳しく罰した。一人に甘くすると統制はつかない。ましてや、兄弟であると言うだけでひいきにしていたのでは関東武士はついて来ないし、自分の立場が危うくなる。

あくまでも義経は、肉親の情を頼朝に求めたが、統率者頼朝はそれを切り捨てることで自分の地位を守ろうとした。それが頼朝に無断で検非違使尉に任官されたということで、義経を拒否する不和の形で現わしたのではないだろうか。

余談になるが、『義経記』等では、二人の不和の原因は梶原景時の讒言による所が強いと、梶原を悪人に仕立て上げており、頼朝も梶原の讒言を信じて義経を遠ざけたとしている。頼朝に対する批判はほとんど書かれていない。それは、義経に対する頼朝の仕打ちを、頼朝の権勢に対して表立って批判出来ない家臣や民衆達が、梶原を悪人に仕立てあげることによって、間接的に頼朝を批判しようとしたのではないだろうか。この作品の成立時期が鎌倉時代であると言うことから考えられるのである。

## 節二節 正室の子と側室の子

頼朝は、大江広元から義経の嘆願状・「腰越状」の内容を聞き涙を流した。それなのになぜ頼朝は義経に会おうとしなかったのだろ

うか。「時のヒーローとなった義経に対して、頼朝はまことに冷たかった。それは、母の怨念が彼の胸中にわだかまりをしこらせていたからかもしれない。」(邦光史郎『平家物語の舞台』P180)「母の怨念」とは何のことだろうか。

「当時の風習として、子は母の身分によって、家督を決められたのである。」(南條範夫『源義経』P130『源平の盛衰』)当時は、一夫多妻制であったので、同じ義朝の子供と言ってもその兄弟全てが同じ母を持っていたわけではない。『尊卑分脈』によると、長男義平の母は「橋本遊女、或朝長同母」で、次男朝長の母は「修理大夫範兼女、或大膳大夫則兼女」であり、三男頼朝の母は「熱田太宮司藤原季範女」で正室であった。平家討滅の時「大手の大将軍」を務めた六男範頼の母は「遠江国池田宿遊女」であり、「搦手の大将軍」を務めた九男義経の母は「九条院雑仕常盤」であった。たくさんいる義朝の妻の中で、頼朝の母は、身分が高く正室であると言う誇りを持っていた。それは自然に子供である頼朝にも受け継がれて行ったようだ。頼朝は、母が正室であるが故に、三男でありながら次期の源氏の棟梁として育てられていたのである。

それなのに「義朝は常盤の館に入り浸りとなって、一向に正妻の許へ戻ってこなくなりました。そのため、正妻は気位の高い女性であったから、(中略)憤然として実家へ戻ってしまった。」(同前P179)父義朝から母を遠ざける原因となった常盤。その常盤のせいで、頼朝は源氏の嫡子でありながら、母の実家で父のいない生活を強いられていた。頼朝は、母の寂しげな様子や憤りを見て育った。

このような幼い頃のわだかまりが心の内にあるため、常盤の子で

ある義経が、はるばる奥州から頼朝を頼つて来て、頼朝は義経を客観的に見る事が出来たし、戦上手である義経を利用こそすれ、決して信頼しようとはしなかった。頼朝は義経に対して、肉親の情をあまり抱いていなかった。だから義経がいくら腰越からわび状を出しても、筋を曲げてまで義経に会おうとはしなかった。これが同腹の弟であれば、もっと親密に接していたかも知れない。

それに対して幼年期から肉親の情に飢えていた義経は、頼朝を信じきっていた。僧侶の中で育った義経は、正腹・妾腹の区別をあまり考えなかったのかも知れない。然し幼い頃の頼朝のわだかまりは、義経を客観的に見、ひいては、不和の間接的な要因になっていたのかも知れない。

## おわりに

まだまだ資料調査も不十分であり、推敲も中途半端なままの未熟な論文ではあるが、曲がりなりにも一つの作品として仕上げる事が出来たことに内心ホッとしている。

「源九郎義経」と言う人を見つめて来て感じたことは、人は環境や周囲の人々の影響によって育って行くものだと言うことである。彼の人柄や行動は、彼の幼い頃や成長過程で習得したことの現れである。人と言うものは一人では生きて行けない。社会という団体生活の中で、お互いに活かし合いながら、持ちつ持たれつで生きていくということをしみじみと感じた。

機会があつて、私は鞍馬寺・貴船神社を訪ねることが出来た。このことは、義経の生いたちを考える上で非常に役に立ったと思う。それは、その人物の育った場所に立つてみるることによって、作品の

中で感じた印象とは違った感動を得ることが出来たからである。現地に行つてみるこの大切さを痛切に感じた。

「源九郎義経」については、一般的にはものすごく勇敢で激しく、戦をすれば右に出る者がいない程強くて立派な英雄だと思われている。そればかりではなく、他人の優しさにはもろく、人を信じやすい好人物な面もある。案外これ程人間らしさのある人はいないのではないかと思わせるような、そんな人物のような気がする。超人的に思われがちな義経が、隣人の気安さで今私の身近にいるような感じが出て来る。義経は中世に生きた人だが、八百年の歳月が流れても、その人間性は本質的には全然変わっていないのかも知れない。もしタイムトラベルをして、義経が、今の私達の時代に来て、超人的に扱われたり疎外視されることはないだろう。ただ彼は、自分の信じた道を、精一杯に生きぬいたと言うことだけは誰にも負けないと思う。そのことが私には彼の魅力なのかも知れない。

そしてまた、義経の人間性を探つて行くうちに、人として一番大切な「生きる」とは何だろうと、かえって疑問が生まれて来た。しかしそれは敢て考えないことにして、とにかく、義経と言う人について少しでも多くのことを知りたいと取組んできた。そして調べて行くうちに――本当に当たり前のことなだけども――一日一日を大切に日々努力することが「生きる」と言うことではないだろうか、と思われるようになって来た。普段何気なく見過ごして来たものが見えて来たような、そんな気がする。義経との触れ合いを契機に、現実には生きている人を大切にすることはもちろんのこと、書物の中に生きている人々とも触れ合つて行きたいと思う。

最後に、再び論文に取り組み直す機会を与えて下さった諸先生方、

行き詰まってお訊ねするといつもわかりやすく助言して下さい。指導の野崎先生、励ましてくれた友達に深く感謝する次第である。

### 参考文献

- 『義経記』（日本古典文学全集31）  
梶原正昭校注・訳 小学館（昭46）
- 『平家物語二』（日本古典文学全集30）  
市古貞次校注・訳 小学館（昭50）
- 『歴史と人物』―特集・若き英雄の生涯 源義経―  
中央公論（昭51）
- 『国文学』―解釈と教材の研究―（昭33）
- 『草燃える』NHK大河ドラマストーリー  
日本放送出版協会（昭54）
- 『源頼朝』 永原慶二 岩波新書（昭58）
- 『源平の盛衰』「源義経」 南條範夫 世界文化社（昭41）
- 『三省堂日本史』改訂版 稲垣泰彦他 三省堂（昭55）
- 『傍用日本史ノート』 兵庫歴史学会 清水書院（昭55）
- 『吾妻鏡を耕す』 小泉輝三郎 新人物往来社（昭55）
- 『平家物語の舞台』 邦光史郎 駟々堂（昭46）
- 『吾妻鏡 前篇』（新訂増補 国史大系32） 吉川弘文館（昭39）

### 〔評〕

副手をしている瀬尾さんは去年の卒業生です。副手の仕事にも慣れて、ようやく心にゆとりをとりもどしたと思われたころ私は彼女

に、卒業論文の再検討をすすめました。それ以来、瀬尾さんの心に「源義経」の影像が住みついたようです。

瀬尾さんの研究テーマは「源九郎義経」の人間性を追究することでありました。瀬尾さんにとって若武者義経は、「牛若丸と弁慶」の童話以来の幼なじみであり、現在でもなお憧憬の人、「なぜかくまで義経を身近に感じるのか」、その点を究明することが目的だと述べています。

六十頁にちかい卒業論文には、真面目さ誠実さは現われていますが、やや文献や参考資料にとらわれ過ぎて、肝心な義経の人間性についての究明や考察がやや弱いように感じました。いわば、開花を待つふくらみかけた蕾（つぼみ）という印象を受けました。

幸いにも副手として母校に残った瀬尾さんは、一度敷いた研究資料の軌道に添って、じっくりと再検討するチャンスに恵まれました。図書館の利用や先生方のご指導も得られ、余裕をもって楽しんで勉強していたようです。そして、百頁に余る卒業論文が出来あがりました。構成も構想も、源九郎義経を軸として考察され、随所に作者の心のぬくもりと哀歎を感じさせる豊かな作品となりました。

瀬尾さんにとって、今回の卒業論文は、副手としてその学究生活を示す尊い記念となります。私もまたそのことを、心から喜んでおります。

（野崎アサエ）